

# 手と手と手

岡山発 国際貢献

一月下旬の日曜日。

岡山市伊島町のサクランボ公園は冬景色。小動物の気配すらない。空気中の二酸化炭素などを調べた小中学生は、散乱したごみを観察し、拾い集めた。

南東に約一キロ離れた絵図町の観音寺用水では、水質を検査する中学生の横で網を手にした小学生が声をあげた。

「シジミがおった」  
教師や大学生も駆け寄る。「初めて見た」「食べられるかな」。目を輝かせる子どもたちに地元の町内会長が解説する。「二十十年ほど見かけるから、繁殖しているかもしれないね」

同市京山地区は、持続可能な開発のための教育(ESD)として環境改善に取り組んで

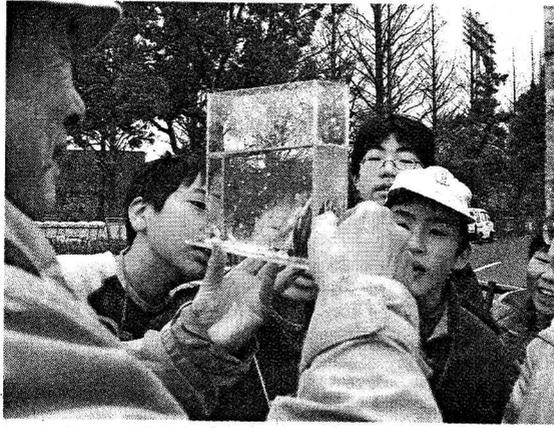
## 冬のとんけん (京山の挑戦1)

いる。愛称はKEEP。この日の「冬のとんけん」には小学生から高齢者まで六十余人りが参加した。

### リーダー

二〇〇三年夏、京山公民館と岡山ユネスコ協会が、地元の小中学校と住民に呼び掛けて始まった。ボランティアグループや地域の高校生、大学生、企業などの支援も受けている。

リーダーは、京山中学校科挙部。春、企画会議を開き、年間計画を立てる。年四回の環境点検や夏休みのエコツアーは事前に準備会議を重ね、運営する。中学校の文化祭に学区内の伊島小、津島小の児童を招いて合同発表会を開くほか、年度末の総合討論会でも中心的な役割を果たしている。



「モツゴにタナゴ、オイカワ…」。解説する町内会長のそばに小学生が集まる＝1月、岡山市絵図町

「活動は、ぼくらの誇り」。三月中旬の卒業式前日、科挙部の三年生は口をそろえて語った。自然環境が身の回りにかつて科挙部は「パソコンあることを初めて実感した」(の)オタク部と呼ばれていたと今は高一になった山根裕太。同じく清原章順は「自己主張が激しかったけど、いろんな人の意見を尊重できるようになった」と自分を語る。

科挙部は年を追って変わった。〇四年秋、給食の生ごみによるたい肥づくりに着手。昨年は、そのたい肥を活用し、ベランダでヘチマを育て、夏の教室の室温を下げる緑のカーテンプロジェクトにも挑戦した。部員が協力し、夏休み中も水やりを欠かさなかった。

### 意見交換

「シジミのいる用水を守りたい」「用水で遊びたくても、ごみが多くて危険。用水を汚さないよう地域に呼び掛けよう」

「冬のとんけん」の後、津島学区連合町内会長の赤木忠志(六〇)は、地区内の下水道整備が遅れていることを報告。「昔は用水で泳ぎ、用水で捕った魚を食べていた。できなくなったのは私たち大人の責任。お詫びするとともに、これからは皆さんの声を町づくりに生かしていきたい」と約束した。

公園を回ったチームは拾い集めたごみを分析して報告。二地域のクリーン作戦に参加しようと呼び掛けた。持ち帰ったごみは、中学生が責任を持って分別処理することも追加報告した。

# 環境改善 ぼくらの誇り

「以前は公民館に処理を頼んでいたけど、一歩前進したね」。毎回、参加している岡山ヒテオクラブ会長・野口武志(〇)は立ち上がり、拍手を送った。(敬称略)